

優秀賞

自分の正義

茨城県 日立市立豊浦小学校六年 仲野 良信

屋久島を知らない人はいないだろう。有名な縄文杉があつて誰もが見てみたいと思うだろう。そんな安易な考えはこの本を読むまでだった。読み終えた私は涙があふれていた。屋久島の歴史がこんなにも困難な道のりを経て今に至っていることを知る由もなかった。

この本は、新聞社のカメラマンとして南極や北極を訪ねていた作者が、日本で大自然の旅をしたいと出会ったのがこの屋久島。屋久島を取材しながら現在の屋久島になるまでの物語である。今でこそ有名な縄文杉だが、伐採を仕事とする人と自然を残そうとする人の人間模様。有名地となり犠牲もあつた生き物や植物。観光地となった今だからこそ、もうひとつの屋久島から歴史の背景を感じながら、今の問題を考えさせられる本である。

私は教科書でイースター島にはなぜ森林がないの

かという屋久島に似たような話を学んだ。イースター島の話は、人間の身勝手な行為で、森林伐採をしたり生態系への影響によって自然が消えていく話である。もし島に入った人間が、イースター島の未来を考えられたら、何か違っていたのかもしれない。屋久島の話では、未来を考えて意見した人がいる。屋久島では、江戸から昭和にかけて伐採が行われていた。伐採をやめさせたい人とその仕事についている人。その間には温度差があつたはずだ。自然を残したい人達が伐採を止められたのは十年もの年月がかかった。それぞれの立場や意見がある中、説得は容易でなかつたに違いない。周囲の理解を得るには、まず意見を出すこと、次に行動すること。知ってもらうこと。そして協力してもらうことが大切だと思つた。

そしてこの本の忘れてはならないもうひとつの屋

久島。縄文杉は自分の命をけずりながら大切な教訓を残している。「木を見て森を見ず」という言葉。小さなことに気を取られて全体を見失うこと。世界の宝である屋久島を守り、伝え続けていくには、縄文杉と共に屋久島全体を考えなければならぬ。そうした時に、そこに暮らす人々や訪れる観光客らが負の歴史の事実を認識し、繰り返し返すことのないよう自覚した行動をとる必要がある。

あの時、守られた縄文杉。それは勇気を出して反対した先人がいたから。おかげで今、屋久島のすばらしい景色を見ることができるのである。私は覚悟をもって見に行きたいと思つた。

私は親に自分がどうあるべきかと問われることがある。意見というのは自分の考えを述べることだが、述べたことには責任をもたなければならぬ。述べた未来まで。述べたことが良い方になるか悪い方になるかは分からない。だからこそ、自分の意見を述べ伝えなければならぬ場面では、自分の信念をもち後悔しないよう発言できる人生を歩みたい。人に流される人生ではなく人に自分の意見をしっかりと伝えられる人になりたいと強く思う。

